



かぐや姫伝説

(皇國地誌「比奈村の古跡」の條より)

明治十七年(一八八四)調査令

静岡県富士郡比奈村の報告

古跡、延暦年中、一夫婦本村内字籠畑に住む。其人、籠を作る

を以て業とす。土人、是を作竹翁と云ひ、又寒竹翁と云ふ。

常に一子なきを憂ふ。或時、竹中より一寸有余の一少女を得たり。

翁姫にて愛育す。漸く成長するに随ひ、容顔美麗音姿柔和、

実に無雙の美女なり。赫夜姫と名つく。時の國司其の美を聞き、

珍宝を以て召せども忘せず。國司遂に來たりて姫と契りを為す。

居ること数年、姫自ら暇を乞ひ、富士山洞に還らんとす。

國司、聴かず。

姫、一箱を遣して何れへか去れり。國司、悲歎限りなし。遂に其

跡を逐ひ、山嶺に至れば大池あり。池の中の宮殿、甚だ美なり。姫、

其の中より顯出す。之れを一眼せば、其の形人類に非ずして宛

も天女の如く、甚た前の容顔に殊なれり。國司、悲みに堪へず、

箱を腋下に懐き身を池中に投せりと。

或は曰く、姫居ること数年、天より白雲を下して姫を向へり。



姫駕して天上せりと有は、旧記及び土人の伝ふる処にして、固よ

り信ずべからざると雖とも、今猶寂寥たる竹林なり(字籠畑に

あり)。即翁姫の居りし所と云ふ。其中に小塚あり、竹採姫と

刻せり。苔結して其頗る古代の碑たるを知る。又赫夜姫及、

籠畑等の字、今猶存せり。村名を古昔、姫名村と称せしと云ふ。

之れに依り一考せば、其口碑旧記或は架空の説にあらざるべし。

補注

本書は、令和三年七月二十六日、富士市竹採公園にて取材中、同園に掲示されていた文書にルビを付し、書き下したものである。

令和三年七月三十日

大中臣正比呂 複記

